

# ネパールのテキスタイルワークについての調査及び 研修と作品発表に関する報告

著者	戸坂 恵美子
雑誌名	北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要
巻	39
ページ	205-220
発行年	2001-03-26
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00000854/">http://id.nii.ac.jp/1136/00000854/</a>

## ネパールのテキスタイルワークについての調査及び 研修と作品発表に関する報告

A Report on a Study of Textile Works and Exhibition in Nepal

戸 坂 恵 美 子

Emiko TOSAKA

### I は じ め に

世界の屋根と言われているヒマラヤ山脈の崇高な美しさと、そこに息づく多彩なテキスタイルワークに惹かれて、ネパール王国に関心を抱きはじめてから久しいが、1999年 9 月テキスタイルワークについての調査及び研修と、国立トリブヴァン大学ファインアート科より招聘をいただき染色による作品発表の機会を得たため北海道女子大学（現在、北海道浅井学園大学）短期大学部特別研究費規定による平成11年度「海外研修費」の助成を受けて、この国を訪れた。最初の訪問はカトマンドゥを主としていたが、中世にネワール文化の隆盛を極めたこの国の歴史は偉大で奥深く、限られた時間では満足の行く研修は不可能であったため2000年 3 月に再び訪れ、訪問地を少し拡大して地方へも足を伸ばし、調査及び研修を実施した。

このレポートは、その報告である。

### II 研 修 内 容

#### 1. 研修地

・第1回目は作品発表開催地カトマンドゥを中心として市中の美術館・博物館・トリブヴァン大学、同女子大学、染色家のアトリエ、染色技術の指導所、織物工場、手工芸品製作所などを訪れた。

・第2回目はカトマンドゥ、バクタプル、パタン、ジャナクプル、チトワン、ナラヤンガード、ポカラ

以上の各地を訪れ、ろうけつ染めの工場、博物館、チベタンカーペットの工場、ミティラー・アートの芸術村、女性の自立を目的とするNGO団体の工房、及び民家の見学、タルー族の民族衣裳、織物、染色の工房等々の見学をした。

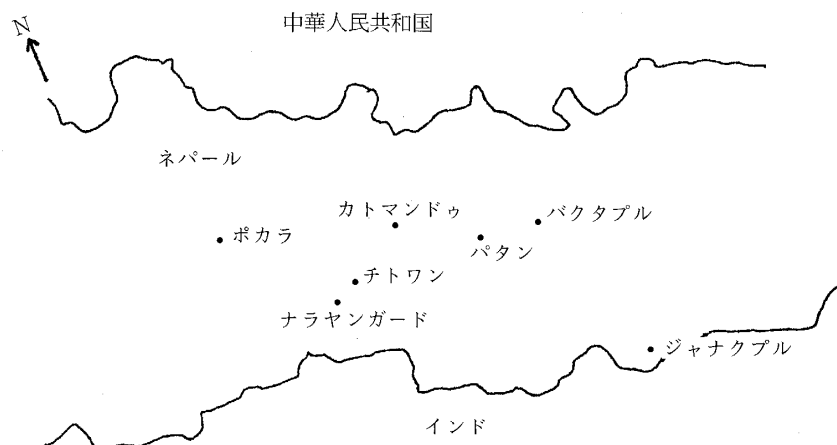
#### 2. 研修期間

第1回目 1999年 8 月29日～ 9 月12日

第2回目 2000年 3 月19日～29日

#### 3. ネパールの概要

ネパールは、北は中国、南はインドに挟まれた小さな国である。最初に訪れたネパールは雨



期のため憧れの山を見ることはできなかったが、再び訪れた2000年の3月は山の美しさ、気高さに圧倒され、感動した。

約14万平方キロメートルの国土は、(南北に180km、東西に約850km) 日本の国土の40%弱であり、南部は海拔70mからエベレストの頂上の海拔8848mまで高低に変化がある。

国土は大きく3つに分けられている。それは自然環境や生態系によるものであるが、先ず東部のインドとの国境沿いの地域はタライと呼ばれる標高60mから280mの低地であり、広大な平野である。交通・産業の要地であるジャナクプル、ビラトナガルのような大きな町もあり、インド系の住民が多くいる低地帯である。二つ目は、南部低地の北側にそびえるヒマラヤ山脈の前山として東西を走る標高2000m～3000mのマハバーラト山脈から大ヒマラヤの山麓にいたるパハール(丘陵)と呼ばれている地域である。

この地域は国土の68%をも占め、温暖モンスーン気候に恵まれ、所々に盆地ができています。首都カトマンドゥも、又観光地ポカラもこの地域に存在し独自のネパール文化を築き上げた。3つ目は、国土の最北端となるチベット高原に続く半乾燥地帯である。

以上のようにネパールは、亜熱帯気候から寒冷気候までの幅広い自然環境におかれている。過酷な自然環境は決して人々の生活に適したものではないが、外部からの軍事的侵略からは免れ、逆に難民なども安住の地としてここに移住したと見られる。インド、地中海地域、チベットから幾度となく繰り返された民族の移動が、複雑な民族構成を生み出し、又多くの異なる文化をもたらしたのである。民族の種類は50種程度とも言われるが、現在そこに住む人々は、民族言語学的見地からも西または南からの移住者でインド、或いはヨーロッパ語系の人々、そしてもうひとつは、東または北からの移住者であるチベット、ビルマ語系の人々に分けられる。ネパールへの移住者のはじまりは紀元前1500年以上にさかのぼると言われ、今も尚続いている。

現在残されている史跡によると4世紀のはじめに北インドの王族の一つがカトマンドゥの谷に入り、この王族によって5世紀半ばに王朝が開かれ、リッチャヴィ王朝歴代の王によってヒンズー教がもたらされ、同時に仏教も保護されて多くの寺院が建てられている。

カースト制度もこのころに定められ、現在に至ってもまだ厳しい制度として存在している。

例えば、身分の違う若者同志の恋愛や結婚は許されない。又身分の高い人々は、低い階級の人々が作ったものは、口にしない。聖牛崇拜もこの時代に導入され、今も尚続いている。かつての日本のお犬様のように、路上に横行する牛を車などで轢いたりすると、人身事故よりも重い罪として罰せられるという。このような歴史を経て、10世紀ころより15世紀ころにかけて王たちは、大理石で美しい都市―カトマンドゥ、バクタプル、パタンなど―を作ったのである。標高1300m前後のカトマンドゥとその周辺の都市は何世紀もの間、文化の中心地となり、インド、チベット、中国の貿易の中心地として栄えたのである。

13世紀初めにはマッラ王朝により、カトマンドゥに最初に住みついた土着民族のネワール人の文化が積極的に保護され、14世紀後半には中央集権化が進み、15世紀末にはマッラ王朝がカトマンドゥ、パタン、バクタプル王国に分裂した。この狭い地域に三つの都市ができたことにより、互いに対立し、競い合ったために、優れた文明を築くこととなった。王宮はもとよりレンガの家並みや、多くの寺院が建てられ、金銀細工や木彫、その他音楽や舞踊など各種の文化が発達したのである。

しかし、1769年シャハ王朝がカトマンドゥを征服して以来、隣接する諸国との摩擦を生じ、18世紀末のチベットとの戦い、1814年のイギリスとのゴルカ戦争などが起こった。その後、歴代の王たちの間で政治権力をめぐって争いが絶えず、彼等の基本的政策は鎖国で、西欧的近代文明を拒絶した。

この鎖国は100年に及び、文化の停滞のみならず、権力的腐敗と経済的破綻へと進展していった。1951年トリブヴェン国王によって王政が復活したが政治家との争いは続いた。1959年にはじめて総選挙が行われ、民選内閣が成立した。しかし翌1960年にはマヘンドラ国王によって、国王親政体制が確立した。

又、政治組織としてはバンチャット制度が定まり、政党が認められない議会制度が導入された。1990年に入って、民主化運動が拡大しデモなどで死傷者まで出し、ようやく国王が復党政党制を認め、その後の新憲法で立憲君主国になった。

1991年5月には32年ぶりの総選挙が行われ、第一次コイララ内閣が誕生したが、改善されない経済の悪化とインフレにより庶民の生活は苦しいものであり、こうしたことへの不満が募り、政治的安定はまだまだのようである。

ネパールの人々は、国王を尊敬し、商店などには必ず国王夫妻の写真が飾られている。しかし、一方では頻繁にデモが行われ死傷者が出たりしている。私も再度訪れた折にデモに遭遇した。その日は、カトマンドゥも一日中店は閉まり（薬局だけは開いていた）、車は一切走っていないかった。

カトマンドゥの朝は早く、人々は慌ただしく動き始める。

一般家庭には、まだ余程でないとマイカーはなく、自転車やバスで通勤している。そのバスも中古のかなり傷んだものであり、どれも満員である。人力車も走っている。盆地のため車の排気ガスで空気は汚れ、ホコリっぽい。

このような市街地で行き交う女性は、現在でもまだ民族衣装のサリーを纏っている。又は少し機能的に見えるクルタ・スルワールを着ている。男性は普段は普通の洋服だが、身分を表すトピーを被っている。

サリーは、多種多様の色彩と模様で大変美しい。ウェストのあたりは覆わずに肌を出した着方が正しいのだが、贅肉があればある程、幸せだと言う。つまり夫の働きが良いということで、ダイエットがブームのようにになっている日本人とは違う価値観に驚く。

サリーを専門に売っている店が数カ所あるが、カラフルな布が所狭しと並んでいる。化学繊維の安価なものからシルク100%に手刺繍を施した高価なものまで、様々である。TPO、身分等でも制約を守っている。家に招待客を迎える時などは、正装をして敬意を表してくれる。

クルタは膝下位までの長めのワンピースで、その下にスルワールと呼ぶズボンを組み合わせている。上下共布で作られ、こちらも大変凝ったものが多い。例えば、胸元や袖口などに美しい刺繍が施されたりしている。

いにしえの建造物、そしてサリーの女性…とあたかも中世期へタイムスリップをしたような錯覚を覚える。しかし、現実には目を向けると、この国は過酷な貧困に悩んでいる。孤児も沢山いる。世界に誇る文化遺産も、多くは傷つき、汚れ、誠に残念に思う。世界遺産の指定を得ている建造物も2年に一度の検査で修理の予算もなく、止むなく指定を取り消されてしまうものも少なくないと聞く。但し、そこに住む人々は何の人も素朴で人なつっこく、真面目であり、貧しい暮らしの中でも信仰心を失わず、逞しく暮らしている。新旧の入り混じった佇まい、多民族、強いては神と人とが共生する何とも不思議な世界である。

このような中でテキスタイルワークの品々は、至る所で目に入ってくる。いずれも民族性を有し、素朴で美しく、楽しいものばかりである。サリーはもとより、タペストリー、テーブルセンター、カーペット、バッグ、ストール、マフラー、他にインドやチベットの品々も含めて、整備された店内で棚に整然と陳列している所もあれば、店舗も持たず路上に並べている場合もある。面白いのは、染めの木版やこれに使う染料が、道端で売られていることだ。色数も豊富な粉状の染料が並べられ、大小の缶の好きな方を選んで、欲しい色を入れて貰う。使用法は煮溶かして、レモン汁を入れるようにと教えてくれた。

ネパールのテキスタイルワークがこの様に種々さまざまなのは、民族が必ずしも地域的にはっきり分かれている訳ではないことによる。そのためお互いに影響し合って様々な文化が生まれている。

各グループが生活していく上で、それぞれの技術をもち、各家庭毎に次の世代へと受け継がれていく。彼等はその地域で得られる物を中心に生活を営んでいる。変化に富んだ気候が様々な植物を作り出し、沢山の植物繊維を収穫して紡がれ織物に使われている。寒い地域では植物には限界があるため羊毛、山羊、ヤクの毛・皮が使われ、それぞれの地域で得られる材料に合った織機や道具が、その地域の木や竹で作られている。小さな民族もこのような独特の文化を持った所以である。



色とりどりのサリーが並ぶ専門店



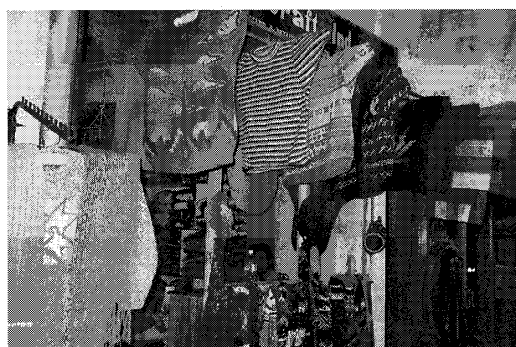
民族衣装 サリー(中・右)  
クルタ・スルワール(左)



版染め用の版と染料を売っている露店



版染めやシルクスクリーンの布の店



手編みの店

他の地域から隔たった所に住む農家は、規模は小さいがあらゆる物（マット、壁掛け、スカーフ等）を自分たちで作し、生活を支え、又楽しんでいたのである。

1951年まで、国境付近の隣接する国とインドから中国までの貿易路の近くの地域以外は、他の国とは全く接触が無かったので、その独自性は失われなかったと言える。ただ残念なことに、古代のネパールのテキスタイルに関しては、実証されるようなものはまだ発見されていない。現在、国立の考古学部が織機や糸巻などを調査しているところである。しかし、カトマンドゥの寺院など至る所に存在している彫刻や絵画から何世紀にもわたる衣装の特徴を窺うことはできる。

イラクサやヤクの毛で作った丈夫な袋、ウールの毛布、竹編みの籠、編み込み模様の木綿のショールやキャップ（Topi）等は、正しく美と実用性を統合する工芸の真髄“用と美”の極致である。山岳地帯の人々の織物の技術は素晴らしく、カトマンドゥのプロの作家達も賞賛を惜しまない程である。それは生活のためばかりではなく、祭事や儀式のためにも作られているのである。これは、信仰心の厚いネパールの人々にとって大変重要なことである。

#### 4. ネパールの染料と染色のテクニクについて

布や糸を染料を使って染色することは、かなり古い時代から行われていた。様々な色素として伝統的に使われている多種類の植物が、国内全体に存在している。現在判明しているものとして14世紀以来カトマンドゥでネワール族の人々によってチップパ（Chippah）による染色が行われている。18世紀になるとカークバトリックが「madder」（つる植物）を発見。このmadderは、古い記録のなかでも最もよく出てくる染料である。1940年ころまでは、植物染料が主流であり、シェルパ族の人々も多く植物染料（野菜なども使用）での染色を行っていたようである。その後1950年以降、インドより急速に化学染料が導入されるようになったが、カーペットなどの染料としては天然染料が重要な役割を果たしている。この天然染料には、単独染料の他のものとは混ぜなくても発色できる染料、混合染料の自然の土や石などから出る色素を混ぜて使うものの2種類に分けられる。その染色法もいろいろな方法があり、中には家族の間だけで伝えられ、秘伝とされているものもある。

よく使われている染料を挙げると次のようなものがある。

##### ・Madder（マダー）

ネパールで最もよく使われている染料であり、オレンジゴールドから深紅、淡いピンクまで濃淡が得られる。とがった葉をもつつる系のハーブで山岳部中央の森の中に生育し、冬季に採集する。成長の異なるものを混ぜることにより、赤に変化をつけたり、一度染めた後、再び使って淡い色を出したり、他のものと混ぜたりして色に変化を出すこともある。

##### ・Indigo（インディゴ）

最も古い染料で、インドでは2000年の歴史をもつ。染料の中でも代表的なものである。インディゴフェラの葉を発酵させて、アルカリ性溶液につけて染液とする。

1880年頃はネパールで生産していた記録があるが、現在は殆どインド産である。

- ・バンベリー

とげのある低木、枝から濃い黄色の染料がとれる。

茎の外側をナイフで削って、中の黄色の部分を取り出し、小さく刻んで糸を煮る。カーペットを染めるには、明ばんを用いる。

- ・くるみ

標高1200m～2500mにあるクルミの殻からウールを染める染料がとれる。

毛布、ラグ、服地などの染めに使用。色はベージュや茶が染められる。

- ・ギシギシ (Sorrel)

野性のギシギシは、1m程の大きさになるハーブである。採集してから2・3日の新鮮な葉を使う。色はオリーブ色。羊毛を染めることができる。又このハーブは薬用としても使用されている。

- ・ルーバープ

多年草のハーブで、大きな根をもつ植物である。根から濃い黄色、葉からは黄色っぽい色素がとれる。

この黄色で染められたものは、ラマたちによって着られるが、発酵させたビールとインド染料の緑を加えると量によっては、紫、濃い赤、茶、黒も得られる。

- ・モリング

赤の染料。根の皮より色素をとる。染める糸は、灰の混ざった油で処理しておき明ばん系の植物の葉の粉と混ぜて、一晚染料に漬けておき、その後乾かす。

以上いくつかの例として挙げたが、ネパールの人々はこの他、多種多様な植物から染料を採集し、混ぜ合わせたりして様々な色を出している。

## 5. ネパールの織物について

現在も山岳地帯に住む人のテキスタイルは、実生活に結びついていて、様々な材料が色々な技法で、織物、編物、クロスステッチ、組紐、三つ編み等により出来上がっている。その代表的なものが、縦糸、横糸で織られるもので、例えば竹でそれを作ると屋根になったり、壁になったり住生活に生かされている。織るものによるが、稲・ワラなどの場合は、床に直接置いたシンプルな織機を使っている。この織機には、日本のいざり機によく似たものもある。

山岳中央部で生産されている代表的な織物ダッカは、コットンのテキスタイルの中で、最も多く使われているもので、複雑な模様をパターン化した色彩豊かな布で、男性のトピー、女性のショール、ブラウスに使われる。トピーとは、男性用で身分を象徴する民族衣装の1部である。ダッカの代表的な色は、黒・白・赤・オレンジなどである。パターンは織手の技術と創造性による一品制作で、二つ同じものを採すのは不可能である。何故この布が、ダッカと言われているかについては、幾つかの説がある。僧侶がバングラディッシュのダッカから帰国した際持ちかえったのではないかという説と、或いは糸などの材料がダッカから輸入されたからではないかという説。ダッカモスリンが、ネパールのものに似ていたからという説、更にはダッカ



から移住して来た人が技術を広めたのではないかという説もあり、いずれも定かではない。

今日、上質のダッカ布は、東部のキランテ民族の女性によって織られたものが多い。キランテ民族とは、リンブ族とライ族を合わせて、現在ネパールで人数の多い民族のひとつである。

このダッカ布は、女性のみが織って、男性が織ることはない。又、この民族が最初に山岳中腹地域に定住した人たちではないかと思われる。ライ族は、アラン川の西側に住み、東側にリンブ族が住んでいる。街の中に住んでいる人は少なく、殆どの人が人里離れた所で小さな畑での農業を営みながら織っている。昔はコットンの栽培もしていたが、近来は人口が増えて土地が狭くなり、それができなくなっている。他の織物は工場で作られるものになったが、ダッカ布だけは手織りものを尊重し維持されている。殆どの男性がいろいろな行事の折りにダッカの布のトピーを注文で作る。中には結婚式などに衣装を注文したりもする。リンブ族の織物で、人気のあるものは濃い赤のベルベットである。織物の製作は乾期の10月から3月までに行われている。家庭の日常生活の中でそれは行われ、女の子供たちは10才位までに技術を覚える。親戚や友人とが共同で作業をする光景がよく見られる。ハタ織機を作るのは男性の仕事である。前述のいざり機とは違い踏み木を使った織機である。

モチーフは、無限大に多種多様で幾何学的なものから花のような自然のモチーフまであり、トピー用には、70cm間隔で色々な模様になっている。ダッカ布は、海外でも注目されて売られるようになってきている。これは、1880年初めにネパールとイギリス政府が働きかけ、海外振興事業の一環として市場が海外へと拡大されたためである。その他ダッカ布は民族を表すために、民族のシンボルマークを入れたショールが使用されることもある。

ネパールの織物はこの他に、ダッカ布ほど知られていないが、伝統的なものとしてダイヤ形や鳥の目のようなパターンの布や緯糸を補充してパターンを織り込んだツイルもある。又、ヒマラヤのイラクサ（アロウ）を繊維として織られた男性用ジャケット、ショール、バッグ、カラフルでパターンも様々なひも織りなどがある。

## 6. 手工芸製作訓練所を訪ねて

カトマンドゥの市街地から少し離れた所に、竹細工、木工、金工、染色など手工芸の指導者を養成している訓練所がある。ここでは、昔日本人が竹細工などの指導をしていたとのことであるが、日本の福岡に研修に来た経験をもつウッタムさんという方が、親切に所内を案内して下さった。日本語もかなり話され、外見も大変東洋的で日本人のような感じの方である。繊細な金属工芸などの展示室があり、又別棟にはろうけつ染めの研究室があった。現在20名（男子5名、女子15名）の研修生が熱心に勉強をしていた。期間は3ヵ月単位でネパール人のみの養成機関で、基本的なろうけつ染めを学んでいた。赤、黄、青、黒のインドの化学染料を使用し、デザインは仏像などパターンが限定されている。

## 7. チベタンカーペットの工場を訪ねて

チベットのカーペットを作る作業は、かなり古いもので中国からの影響がみられる。その歴史は明の時代（1368年以来）に遡る。現在も昔のままの方法で、チベット系の人々によって生

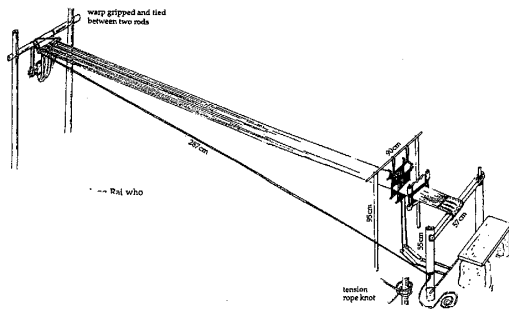


図1 織機 踏み木付き

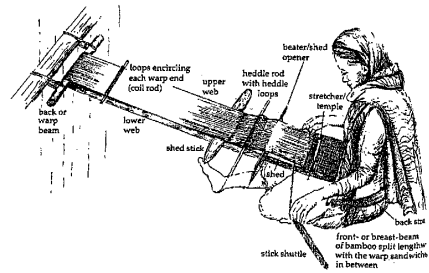
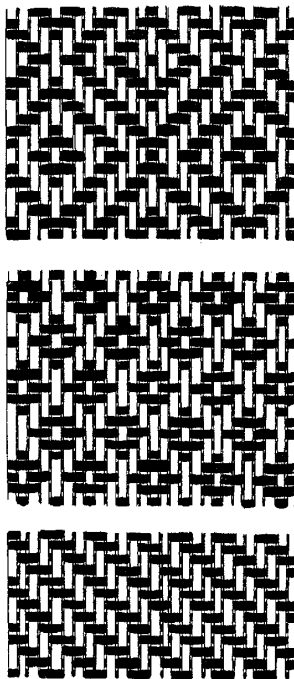
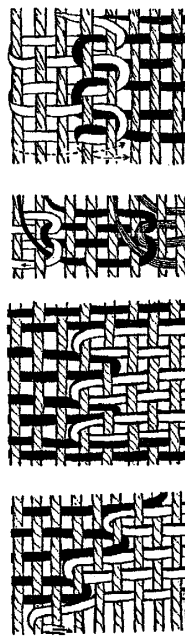
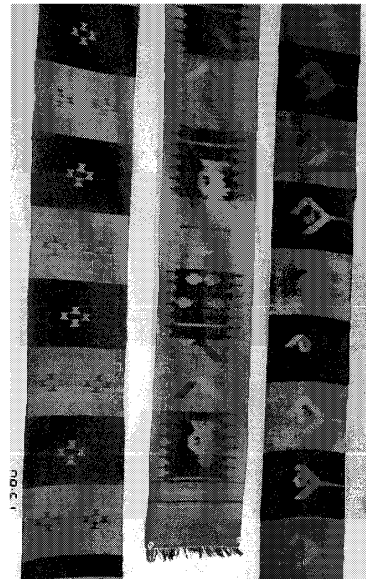
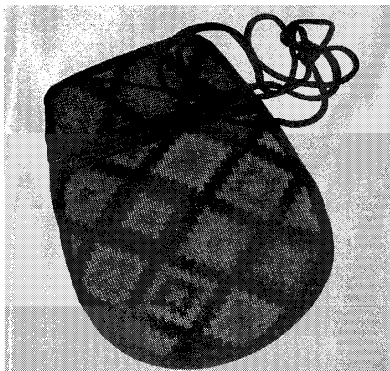


図2 日本のいざり機に似ている

図3 ライ族の伝統的織物  
ダイヤ形図4 ダッカ織りの  
緯糸の入れ方

ダッカクロス



ライ族の織物のポシェット



トピーを被って祭の街角で楽器を奏でている光景

註＝図1・2・3・4は「NEPALESE TEXTILES」より

産されている。織っている人たちは、年配の男性もいれば、若い女の子もいた。伝統的な模様は幾何学模様やクロス、山と雲の境界を象ったものの他火の鳥、龍、虎、仏教のシンボルマーク等がある。

今日のネパールのデザインは、チベットの伝統的なものと中国や西洋の影響をネパール人なりにアレンジしたものである。

#### 8. カシミヤの工場を訪ねて

カシミヤはカシミール地方の山羊の毛による織物であるが、1本の毛の根元の僅か1cm位を使用するので、一頭からほんの少しより生産できない。軽くて暖かく、稀少価値も手伝って世界中で、珍重されている。

見学した所は、ネパールでも指折りの工房だが、家内制手工業でこじんまりとしたものであった。

#### 9. Fair Trade Group Nepalの工場を訪ねて

この会社は、染色、織物、刺繍、フェルト、アップリケ、ニット製品などを製作している各企業をまとめ、貿易や国内での販売を行っている。カトマンドウの市街地に洒落た店舗を構え、全て手作りのクラフト製品を販売している。郊外にある工場の見学を快く承諾してくれた。工場は決して設備が整っているとは言い難いが、多勢の人がのんびりと、そして楽しそうに働いていた。

##### 所属企業

「Association for craft producers (ACP)」

伝統的な版染めの美しい作品、シェルバ民族のアップリケ、チェックの織りによるテーブルセンターやマット、紙染めのバッグ。

「Janakupur Women's Development Center (JWDC)」

ミティラー・アートで知られる大変に個性豊かな作品を製作している。(詳細を後述)

「Kumbeshwar Technical School (KTS)」

ネパールのニットも最近注目されてきているが、ここでは学校を持ち、若い編み手を養成している。セーターや手袋、ソックス、帽子など編み込み模様で編まれ、カラフルでモダンなデザインである。他にスイスの染料を使用して染めている。伝統的ではあるが、現代的なカーペッツを製作している。

「Mahaguthi Craft With a Conscience」

ネパールの代表的なパターンの魚の模様などの版染めを紙や布にほどこしたランプシェード、手帳などを作っている。他にダッカクロス、竹のバスケットリーも製作している。

「Manushi」

大変原始的な方法で作られているフェルト、絞り染め、織物で天然素材の紳士用衣服を製作。絞り染めもシンプルなデザインだが、面白い。

「HASTAKALA」

昨今日本でも大流行のパシュミナのショールや木綿のバッグなど、機能的で楽しい作品を生産している。

「Women Skill Development Center (WSDC)

縞模様を中心としたボストンバッグ、ショルダーバッグ、手提げ袋などがある。他に、木綿による女子の衣服もある。

「Nepal Leprosy Trust(NLT)」

素朴なろうけつ染めでネパールの風景、人物などを描き出した。大きいものでは壁掛け、小さなものではしおりなどがある。

「New SADLE 」

ダッカクロスや紙、ラッピングペーパーなどを製作している。

各企業毎に様々なものを製作しているが、それぞれの特徴が顕著である。

以上は、テキスタイルワークのもののみを記したが、この他に各企業共に皮革製品、金工製品、陶芸品なども製作している。

#### 10. ミティラー・アートを訪ねて

東ネパールに属するジャナクプルは、カトマンドゥから車で11時間ほどの所にあり、紀元前1000年頃、ヴィデーハ王国の首都であったと言われている。町の中心は、王女シータの誕生を記念して建てられたジャナキー寺院と、ラーマとの結婚を記念して建てたラーマシータ結婚寺院がある。この二つの寺院は、明るい青を基調色として黄色、朱色などで装飾したモザイク調の美しい建造物である。

私たちが到着した日は丁度祭りの日で、人も犬も顔や体を赤い粉で塗ったり、模様を描いたり、これも信仰の証であるのだろうけれど、旅人の私には不思議な光景として目に映った。

翌日、この地を訪れた最大の目的である民族芸術村、ミティラー・アートを見学するために、ジャナクプルの南のクワ村へと向かった。まだ寒い3月の札幌から30度を越えるクワ村を訪れて、体調を整えるのに一苦労したが、20年位前にミティラー・アートを知ってから来てみたいと思った所であっただけに、感動もひときわであった。

ミティラー・アートとは、この地方の女性たちによって3000年の昔から家の壁に、信仰のため或いは、祝い事のために白い壁に赤、黄、青などでカラフルに描かれた独特の絵のことである。日本でも新潟県十日町のミティラー美術館により紹介されている。

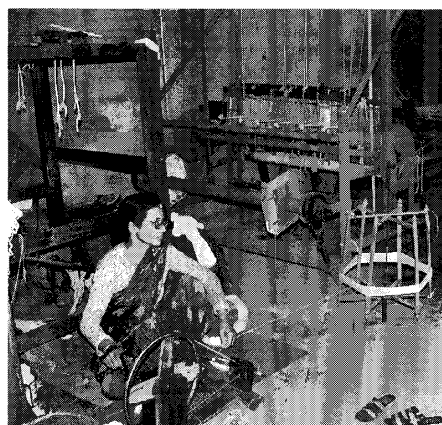
クワ村には、Janakpur Women's Development Center (NDC団体) があり、女性の自立を目的として技術を授かり、伝統美術の図柄を応用して、染色や刺繍、アププリケなどの商品を作っている。カトマンドゥなど都市で販売するほかに、日本やイギリスに輸出もしている。女性たちは年齢を問わず、なかには幼児を連れている人もいるが、サリーを纏い地べたに座って、楽しそうに手を動かしている。のんびりと、見学者がいようと気にする様子でもなく、日本人の私たちから見ると、遊んでいるようにさえ見える。

そして、この伝統的な模様は母から娘へ、娘から又、その子へと伝わっているのである。特

別に民家を見せてくれることになって訪ねた家は、小さな天井の低い白壁の家であったが、表側の壁も中庭に面している内側の壁も所狭しとばかりに、この独特の絵が描かれている。次々と大人や子供が出て来て、挨拶をしてくれるので、何人家族と聞いたら45人と答えた。本当に驚くやら感心するやらであった。



ミティラー・アート



糸を巻くNDC団体の女性



ミティラー・アートのクッションカバー



ミティラー・アート



ろうけつ染めを学ぶ訓練生



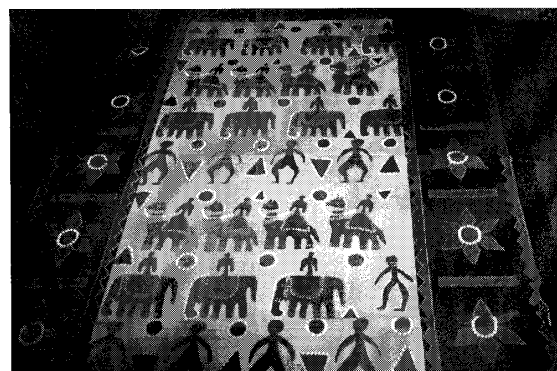
左と同じ



版染めのテーブルセンター



フェルトの製作風景



アップリケのタピストリー



ダッカクロスのショール

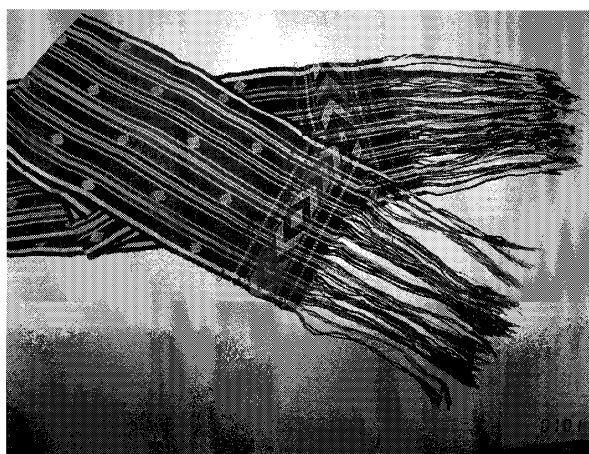




カシミヤを織る男性



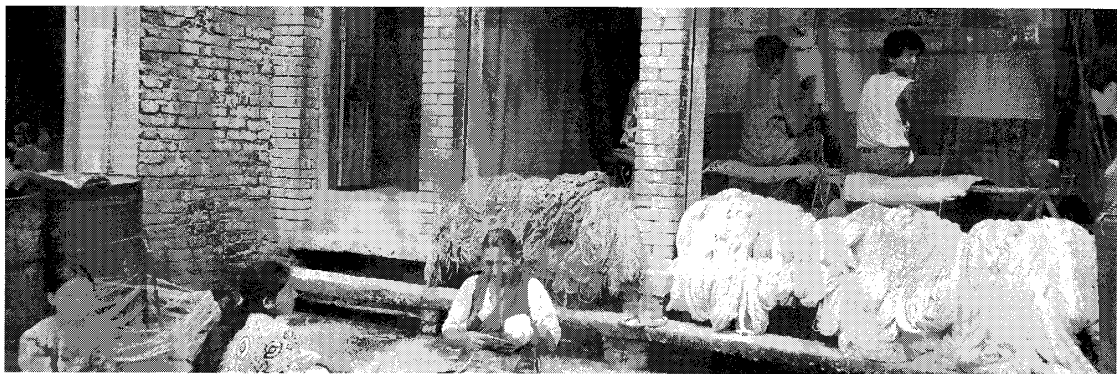
チベタンカーペットの製作風景



ブータンの織物



チベタンカーペットの製作風景



家族でカーペットを織っている光景

## 11. ネパール カトマンドゥでの作品発表について

本学短期大学の服飾美術科の第1回生で卒業後5年間、私の助手として勤務して下さった大田 美鈴さん（旧姓 酒井）がJICAのアドバイザーとしてネパールに赴いた御夫君と共にカトマンドゥに滞在しておられ、トリブヴァン大学のファインアート科主任のマナングール教授と知己となられ、その御縁で日本のテキスタイルを見たいということから当大学主催で、個展を開催していただくことになった。

個展会場となったカトマンドゥのナショナル・アカデミー・ファインアート・ナハは、大変にクラシックで由緒ある建造物であった。当時はかなりの贅を尽くしたと思われるもので、大きな中庭を持つ広大な建物であり、現在は1階部分の半分は孤児を対象とした学校（幼・小・中・高）であり、半分は公的な儀式などに使われ、2階がギャラリーや事務室、3階は芸術家のアトリエとして使われている。ギャラリーは、美しい天井画の施された王朝風の部屋であり、私は3室使わせていただいたが、各部屋にバルコニーがあって、そこから入る風が薄い布の作品をほどよく揺らしてきて、効果的であった。

今回の出品作は、絵本の原画の染絵や、薄いシルクを使用した“風に光に”シリーズが数点、ろうけつ染め、型染め、絞り染めの中から特に日本の伝統的なものを取り入れた作品などを展示した。会場入口と付近の道路には横断幕が張られ、初日のオープニングは主催者のトリブヴァン大学の学長をはじめ多勢出席して下さり、テレビや新聞記者などマスコミ関係者も多勢集まり、厳粛でそして盛大なセレモニーが行われた。

その日のテレビと翌日の朝刊は5～6社にも及び、ネパールの人々の熱心さに感心した。会場は連日多くの方々が訪れ、なかには専門家もいて技術的なことも話し合うことが出来、後日その方たちのアトリエへ招いて下さったりと有意義であった。

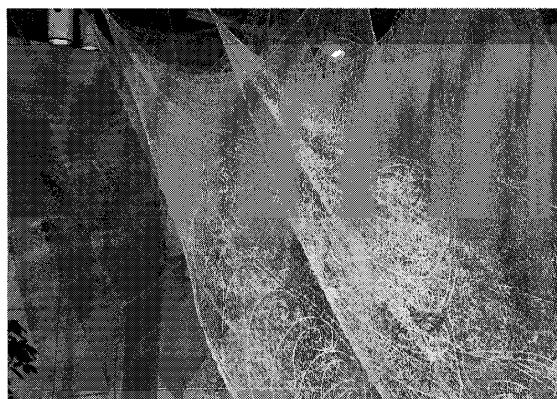
尚、終了後はトリブヴァン大学の女子大学部から日本の染色についての講演会の依頼があり、参考作品やスライドを混ぜての話に、質問も相次ぎ喜ばれた。この行事は私にとって、大変印象深く貴重な体験となったことは言うまでもない。

### जापानी कला प्रदर्शनी नेपालमा

काठमाडौं/जापानी कलाकार  
प्रतिको तोसाकुरोको नेपाल मन्दिरको  
सम्बन्ध (गणना) नेपालमा यही भद्र १९  
गते देखि एकल चित्रकला प्रदर्शनी  
संचालन भएको छ। यामकामा  
आधारित रहेको उक्त पदिक, चित्रक  
कुर ४१ वटा छन्। यो कला प्रदर्शनी  
भद्र २३ गते सम्म संचालन रहने छ।  
उक्त कला प्रदर्शनी  
समुद्रपट्टी-वार्थकाममा प्रमुख भूमिका  
धनुषम विरोधियायका उपकुलपति  
नविनप्रकाश लुंग शाहले तोसाकुरो  
प्रदर्शनी नेपाल र जापानका बीच कला  
आदान प्रदान गर्न एक कोषोद्वारा संचित  
हुने कुरा ध्यान गर्नु पर्नेछ।  
योही अवसरमा मोहन  
कोइराला, विजय थापा, कृष्ण मानन्धर र  
उत्तम नेपालीले कला सम्बन्धी आ-आफ्नो  
संस्था व्यक्त गर्न भएको थियो। उक्त  
कार्यक्रममा जीवनहृदयर रायमाझीबाट  
समाहउको भित्री कलागत अभिवृद्धि वि  
प्रमुख अतिथि र तोसाकुरोई कृष्ण  
मानन्धरले प्रदान गर्नु भएको थियो।  
तोसाकुरो आत्मा सानै



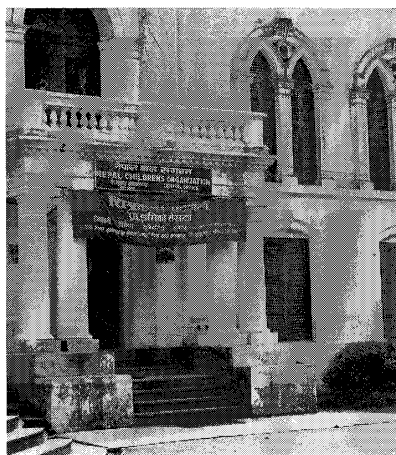
प्रकाशन गरेको कुरा व्यक्त गर्नु भयो।  
नेपालको बारेमा पहिलो पटक खाडी  
नगरपाली महिलाको कोठाबाट परिचित  
एवं प्रभावित भएको कुरा तोसाकुरो बताउनु  
हुन्छ। आफ्नो नेपाल भ्रमण गर्न इच्छा  
पसिले देखि भएको कुरा व्यक्त गर्दै  
नेपालकोलाबाट निकै प्रभावित भएको कुरा  
बक्त गर्नु हुन्छ।  
इन्द्र के.सी.बाट



ネパール語の新聞・個展の紹介

個展会場風景





個展会場の前景



女子大での講演

### Ⅲ む す び

この国は、テキスタイルワークのメッカと言われているインド、民族色の濃いテキスタイルワークを持つチベットと隣接していること、両国からの移民族も多いことなどから考えてもテキスタイルワークの種類が豊富なことは当然のことと思う。しかし、未だに決して技法が進んでいるとは言えない、設備や機具も粗末なものである。

しかし、親から子へ、子からその子へと伝わっている方法を大切に、伝統を守り、信仰の心を大切にしている人々の手仕事に心温まるものを感じ、いっそう興味と魅力を感じた。

今回の報告は、紙面の関係で研修地の全てについて述べることはできず、主になる部分に止まったが、いずれ又機会を得て訪れ、この奥深い国のテキスタイルワークを研修しまとめたいと考えている。

更に、私が長年にわたり抱いている研究テーマ「北方圏のテキスタイルワーク」との比較検討もしてみたいものである。

生活習慣も大きく違い、交通の便も想像以上に悪く、言語も異なるこの国で、しかも短期間で、大変多くのことを研修できたのは、偏に前述の大田公威・美鈴様の御厚意と御協力によるものである。改めて御夫妻に心からお礼を申し上げ、又、作品発表のために御尽力下さったトリブヴァン大学ファインアート科のマナンドール・クリシナ主任教授と御関係の皆様、この研修の機会を与えて下さった北海道浅井学園大学短期大学部に対して、深く感謝の意を表して報告を終りとする。

### 参 考 文 献

- 1) SUSI DUNSMORE "NEPALESE TEXTILES"  
BRITISH MUSEUM PRESS
- 2) 内田良平著 「カトマンドゥ百景」 山と溪谷社 1992
- 3) 「ネパール ヒマラヤ・トレッキング」 ブルーワールド24 実業の日本社